



Title	1930年代日本映画における近代女性像研究 一映画スタイル分析を中心に一
Author(s)	閔, スラ
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69703
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(閔スラ)	
論文題名	1930年代日本映画における近代女性像研究 - 映画スタイル分析を中心に-
論文内容の要旨	
<p>本研究は、1930年代の日本映画において描かれた近代女性像について論じる。その際、当時の日本において支配的であった父長制イデオロギーが、映画の内容だけでなく映画の形式にも現れていることを明らかにする。</p> <p>近代女性像として取り上げたいのは、二つの類型とその中間形態である。近代日本社会において台頭してきた近代的女性像は様々な形態で存在するが、とりわけ本論では、モダンガールと良妻賢母という女性表象を分析し、展開の参照軸として叙述する。</p> <p>モダンガールは、1920年代から1930年代にかけてモダニズムの主要な表象として活発に消費された女性像である。モダンガールのイメージは西欧の思想と文物を積極的に受け入れ、よりモダンな生活を追求するものである。そして自らを「女性」というよりもむしろ一人の「人間」として認識することで、女権拡張論者たちに前身を持つ「新しい女」などが行った近代女権思想の唱道行為を乗り越える。当時は彼女のあまりにも自由奔放な思考と行動により、「突然変異」と言われることもあった。とくにモダンガールの出現は、社会の関心が母性と家族の延長線上にある女性から、女性自体に焦点が移っていくきっかけにもなった。</p> <p>一方、良妻賢母イデオロギーは、一般的に保守的で伝統的な女性像として認識してきた。しかし、それは実在する女性の類型というよりは、むしろ近代国家に相応しい、高度な教育を受けた女性を創出するためのイデオロギーとして登場し、機能してきたことが近年の研究で明らかになった。また、良妻賢母とは対極に位置するかのように見えるモダンガールという語も、実在する人物をカテゴライズした概念というより、都市部の急速な近代化に対する一種の不安感を反映した概念として現れたことも明らかにされた。つまり、良妻賢母とモダンガールの二つの概念は、いずれも日本の近代が創出した女性像の一つだと言える。</p> <p>映画における女性表象の研究は、とりわけフェミニズム的映画研究として欧米では1970年代頃から盛んになり、日本でも1990年代から徐々に実践され、2000年代から現在に到るまで活発におこなわれている。しかし、今日さまざまに展開している映画に描かれた女性像の研究は、表象の問題のみならず、映画のテキスト分析においても、内容やキャラクターの表象に集中する研究に偏り、映画の形式についてはあまり顧みられていない。そこでこの論文ではボードウェルの「スタイル研究」に基づき新たな方法で分析を展開する。したがって、映画の内容のみならず形式的側面においても、女性像再現の特徴が現れるということを前提に、映画の記号学的テキスト分析を行う。つまり、それぞれの映画において描写される女性像に対する映画の形式的要素が演出された方法を考察し、その中にある特定のまなざしが存在するということを確認する。</p> <p>つまり、映画における近代女性像について論じるにあたり、従来の女性史学的研究を継承しつつも、より映画学的視線から考察をすすめる。したがって本論は近代女性像が1930年代の日本映画において、映画形式の側面からいかなるまなざしで描かれたのかを明らかにする。そうすることで、映画における女性像研究が文化研究として表象や内容にのみ集中されることなく映画学的な観点における分析への関心をうながそうと試みるものである。近代女性像のキャラクターに対する映画の形式的要素を分析する一連の考察をとおしてより補完的な研究方向の提示が期待される。一連の考察は映画における女性像の再現について考えるうえで重要な手がかりとなる。</p> <p>本論では、1930年代の日本映画に限定して、映画にあらわれる近代女性の表象について、次のように考察をおこなう。</p>	

第1章では、映画の中のモダンガールの表象について分析する。まず、女性史的先行研究を中心にモダンガールの特質をまとめた上で映画分析をおこなう。モダンガールを題材にして描いた映画の物語分析を通じて、いかなる主題を持ってモダンガールを描き出すのか把握する。つぎに、モダンガールキャラクターに対する映像分析をおこなう。第1章は二作の映画を中心に展開する。しかし、二つの作品において現れるモダンガールキャラクターは互いに同一な一つの特徴だけを持つのではない。モダンガールは均質ではないため、一つの特徴だけで定義することはできないということが映画を通じてもわかる。二つの作品のなかで、一つ目は、小津安二郎の1933年作『東京の女』である。本映画における近代女性の代表的な三つの姿をすべて内在しているキャラクターちか子をモダンガール性向のキャラクターとして捉え、物語と映像の分析をおこなう。とりわけ、映像分析においてはちか子に対するスタイル演出が目立つ第一シーンを中心に分析する。二つ目に、溝口健二の1936年作『浪華悲歌』^{なにわエレジー}中のモダンガールアヤ子に与えられるショットを分析する。以上の映像分析を通してモダンガールキャラクターにのみ与えられるスタイル演出の特徴が読み取れる。

第2章では、映画中の良妻賢母の表象について分析する。先立つ章と同様に女性史的先行研究を中心に良妻賢母の特徴と概念をまとめる。その後、物語構造と映像分析をおこなう。本章においても良妻賢母のキャラクターを二つの作品から分析する。しかし、良妻賢母キャラクターは戦時体制への進行とともに映画のなかで果たす役割もまた変化して行った。そのため直接分析対象にする映画を30年代前半と後半の映画の中から、良妻賢母の姿が確認できる代表的な映画を一作ずつ選定した。一つ目は、小津安二郎の1933年作『非常線の女』における脇役の和子を中心に分析する。二つ目に、野村浩将の1939年作『愛染かつら』の主人公のかつ枝を中心に分析する。二つのキャラクターとも周辺人物とのショットを比べる方法で分析を進める。第1章において確認したモダンガールキャラクターに与えられるスタイル演出方法に比べ、良妻賢母に与えられるスタイル演出の方式はいかに異なるのか、いかなる特徴が現れるのかを確認できる。

第3章では、モダンガールと良妻賢母のどちらにも規定しがたい曖昧な女性像キャラクターについて分析する。第1章と第2章において現れたモダンガールと良妻賢母に使われた映画技法の特徴を、第3章の分析の参考軸として分析をおこなう。先立つ映像分析の結果を代入してみることで、表象分析だけでは正確に規定できなかった曖昧な女性像が、スタイル演出を通じて正確に規定され、一定の方向に導かれていることが確認できる。

結論として、当時の日本の家父長制イデオロギーが映画の内容のレベルだけではなく、撮影・編集・照明・音響といった映像表現にも色濃くあらわれていることを明らかにできるだろう。そしてそのあらわれたはじつに多種多様であるにしても、映像の作られかたに一定の傾向性をみることができる。

それは、モダンガールキャラクターに対して、閉鎖的でキャラクターを孤立させようとする性格の映像演出をおこなうことである。これとは反対に良妻賢母キャラクターに対する映像演出は開放的なショットとともに、キャラクターに注目する演出がおこなわれることで、観客が映画経験をする際同一視する対象を意図的に提示していることが確認できる。

さらにここで考察する映画がどのように受容されたのかについて、当時の時代状況をふまえたうえで考察する。その際、男性の受け取りかたと女性の受け取りかたとを分けて考えることで、当時の観客が近代女性イデオロギーに対するまなざしをいかに構築していくか、その過程を考察する。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名 (閔スラ)		
	(職)	氏名
論文審査担当者	主査 大阪大学 准教授	高安啓介
	副査 大阪大学 教授	永田靖
	副査 大阪大学 教授	北原恵
	副査 大阪大学 准教授	渡辺浩司
	副査 大阪大学 准教授	田中均

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 1930 年代日本映画における近代女性像研究
—映画スタイル分析を中心に—

学位申請者 閔スラ

論文審査担当者

主査	大阪大学准教授	高安啓介
副査	大阪大学教授	永田靖
副査	大阪大学教授	北原恵
副査	大阪大学准教授	渡辺浩司
副査	大阪大学准教授	田中均

【論文内容の要旨】

本論は、1930 年代の日本映画の主要な作品の分析をとおして、映画に描かれた近代女性の表象について検討している。映画に登場する女性には、二つの主要な類型が認められる。一方のそれはモダンガールであり、他方のそれは良妻賢母である。さらに、映画のなかには両者の中間形態もみられるので、これを曖昧な女とみて、二つの類型の混ざりかたにも注目した。研究を進めるにあたっては、以上三つの女性像について各二作品を取り上げて、全六作品すべてについて、物語構造の分析ならびに映像表現の分析をおこなった。結果として、映画作品の女性の描きかたのうちに家父長的な眼差しが読み取られた。

モダンガールは、1920 年代から日本で盛んに言われ出した女性像で、西洋の思想文物を熱心に取り入れ、モダンな生活を志向しており、新しい消費の主体として登場した。モダンガールは、当時の人々の好奇の対象だったが、家父長制をゆるがす危険をはらむ存在として潜在的に敵視されていたことが、映画作品の形式面にも現れている。たとえば、物語構造の中間点において、モダンガールは生きにくさを自覚するも、生きかたを変えられず、家族から見放され、男性から見放され、社会の制裁を受けて、蒸発するパターンがみられる。映像表現では、カメラがモダンガールを疎外するかのように、フォーカスしなかったり、動きを追わなかったり、正面から表情をとらえなかったりする。

良妻賢母は、旧来の日本女性のタイプとみなされやすいが、高い教育を受けている点において、一般に思われるがちな貞淑な女性像とは違う。近代国家は、家庭のなかで国家に貢献できる人材を守り育てる役割を、良妻賢母という教養ある女性像にゆだねようとしており、松竹の大衆映画もあきらかに良妻賢母にくみしている。映画のなかで良妻賢母はほとんど主要人物として登場しないが、モダンガールと対比される存在として描かれ、結末はたいてい良い状況におさまる。映像表現においても、カメラは良妻賢母の姿をしっかりと見せるよう配慮している。

曖昧な女は、上記二つの類型の中間に位置する女性であり、類型というよりも実態に近い女性であると考えら

れる。当然この曖昧な女について共通の特徴を見出すことはできないが、映画作品において一定の役割を果たしていると考えられる。モダンガールと良妻賢母のあいだに浮遊する曖昧さは、西洋の物質文明への身近な憧れをかきたてながら、その生きかたの不安定さは、女性の新しい生きかたへの不安をかきたてるのに十分である。場合によっては、モダンガールが最後に良妻賢母に落ち着くなどの成り行きをとる場合もあり、良妻賢母への潜在的な加担をここでも指摘できる。

【論文審査の結果の要旨】

日本の映画史研究において、1930年代の文化状況に着目した意義はとても大きい。1930年代日本において、モダニズムの語によって知られる新しい文化が広がるなか、民族主義の高揚によって本来相対立するような思想文化も強まつたからである。日本では、欧米から流入してきたモダンな文化はかならずしも旧来の価値と対立するわけではなく、既存の通念と折り合いをつけてきた側面もある。本論は、大衆性の強い映画をとおして、当時の文化状況の一端を明らかにしている。すなわち、モダンな文化への憧れはじつは上辺のもので、家父長的イデオロギーが映画作品の形式にまで浸透しているさまを描き出しており、緻密な映像分析に裏打ちされているぶん説得力のある議論をおこなっている。

本論の優れたところは、1930年代の松竹映画6作品を選び出し、各作品について二重の分析を駆使して、踏み込んだ考察をしている点である。物語構造の分析では、3部5段8場の組み合わせによって、漠然と把握されがちな筋の構造について法則性を見出すのに成功しており、3種の女性像の振る舞いのパターンを見出している。映像表現の分析では、ボードウェルのスタイル分析をわがものとし、見過ごされがちな映像の細部にまで目を行き届かせている。大変労力のかかる作業だが、膨大な分析結果に埋もれずに、明快な論理構成をとおして一定の結論を導きだしており、筆者の映像研究者としての卓越した能力をしめしている。

本論は、注を見るかぎり多くの先行研究にあたっているが、ジェンダー論の見地からすると、幾分古い議論を繰り返しているようにみえる。高望みするならば、現代のジェンダー論をおさえて問題を立てて、現代のジェンダー理解に一石を投じる結論を引き出してほしかった。またじっさいには、本論に近い映画研究はあったと思われるので、女性像分析にかかる現代までの前例を多く紹介したほうがよい。また、本論文の詳細な映像分析は、高い説得力を発揮しているが、映像がモダンガールを疎外しているという各所の解釈はやや強引な印象をあたえていなくもない。映画会社の松竹の傾向ならびに、映画製作者のプロフィールを証拠として、議論を裏づけることができれば強い説明になると思われる。また、映画に描かれたモダンガールは作られた典型であって現実に存在する女性でないと説明されているが、実社会との関係はやはり気になる。相互作用のメカニズムを解明する視点があればなお高い評価を得ることになったであろう。

以上のような問題点が指摘されたにせよ、到達した成果のうえに要求される事柄である。本論文は、映画作品に真摯に向き合って詳細な分析をおこなっている点で、芸術研究において不可欠な能力があることを証明している。問題の設定においても、全体の構成においても、議論の内容においても、学術論文らしい堅実さを表しており、博士（文学）の学位にふさわしい水準にあると認定する。